

集い舞う祭壇でもあった。
演劇は「空っぽの空間 Empty Space」(Peter Brook) に出現するが、子供たちが好んで入り込む《黒い太陽》(1969年：表紙写真)の空洞を経て、晩年のイサムが空虚な広場に託したのも、「土俵」という聖なる結節点ではなかったか？ 一所不住の流動性が移民国家の原像ならば、イサムの目指した「無」の焦点は、「アメリカ性」の究極の逆説的具現だったのかも知れない。庭を歩む皮膚感覚と、ドローンで景観を上空から移動しつつ見下ろす「離見の見」と——。彫刻家イサムが捏ねた土塊には、その両者が微小と極大とを兼ね備えて顕現する。

*評者は、ひよんな成り行きから、まったく面識もなかった著者の、パリ第八大学での博士論文審査に関わった。その審査報告については、以下をご参照いただければ幸いである。Hiromi Matsugi, *La Sculpture d'espaces d'Isamu Noguchi*, L'Université Paris VIII, INHA, Dec. 21 2018

<https://inagashigemi.jp.org/uploads/pdf/20200318matsugi.pdf>

※松木裕美著『イサム・ノグチの空間芸術——危機の時代のデザイン』(4・21刊、A5判256頁・本体2700円・淡交社)

連載219
「黒い太陽」…北米の文化土壌の葛藤が育んだ
「移民混血児」の「環境芸術」
松木裕美著『イサム・ノグチの空間芸術——危機の時代のデザイン』(淡交社)から

稲賀繁美
京都精華大学教員・
放送大学客員教授

できるような社会環境が整うには、イサムの生涯・半世紀におよぶ歳月が必要であり、複雑に入り組んだ地権や政治闘争、建築施工と立体造形との相克といった諸条件の衝突を乗り越えなければ、計画実現はおぼつかない。そこにはアジア系米国籍者という出自に由来する疎外や差別も加わる。

ノグチといえば「庭」gardenの印象を持つ読者も多いだろう。本書は北米の都市計画政策の変遷のなかで「プラザ」概念が変貌を遂げ、それが日本由来の「庭」といかに融合を遂げ、イサムの代表作、チェイス・マンハッタン銀行地下吹き抜けの中庭に結実したかを辿る。そこにはパリ・ユネスコ本部の庭に未経験のまま取り組んだ無謀なる試行錯誤が転生し、水面に浮かぶ溪流石の意匠は、後年の噴水群へと展開する。

著者は、加工しない自然石に「芸術」など認めない欧米価値観とのイサムの葛藤に触れる一方、水流に「彫刻」を観るイサムの(華嚴的?)構想が、維持管理の面で、必ずしも幸福な結果を招いていない現状からも、目を背けない。「演ずる」舞台でもあれば、幼児の「遊び」の空間でもあるplay groundは分類不能。イサムの希望通りに完成をみることが稀であり、破損に任され、閉鎖された施設も少なくない。だが大地との接触を身体的に体験する「景観」の起伏は、人々の

ニューヨークはマンハッタンを歩いていると、突然目の前に、赤い巨大な立方体と見紛う、サイコロの化け物が現れる。イサム・ノグチ(1904—1988)のRed Cube(1968)。作者は、戦前期に国際的に活躍した詩人・野口米次郎の「私生児」。吹田の万博公園に残る巨大な噴水群や、札幌郊外に没後に完成したモエレ沼公園で知られる彫刻家にして「環境芸術家」である。

本書は著者がフランスで提出した博士論文を一般読者向きに日本語に改めたもの。イサム・ノグチといえ、亡命者、放浪者あるいは越境者などと呼ばれることが多い。本書はこの混血児の足跡を、同時代の北米社会に定位し、そこに生じた葛藤から創作の軌跡を辿る。

恐慌下の北米に寄宿し、古典的な人体彫刻からの開放・拡散を体験した若いイサムは、戦時下に虚空と地底との垂直性に開眼する。摩天楼の林立する北米覇権空間に、それとは逆接するヘテロトピアを幾つも実現した壮年期を経て、晩年のイサムは、衰退に瀕した北米近代都市の中心部再開発、失われた中心の再生に「空間芸術家」としての経験を投入する——。

この大胆な仮説のもと、著者は綿密な現地調査と周到な文献探索に立脚して分析を進めてゆく。都市計画の一環をなす公共空間のデザインに「芸術家」が参画